



リオとタケル

leo  
&  
takeru

中村安希

集英社インターナショナル

リオとタケル

目次

プロローグ 5

第一話 ロールモデル II

第二話 最強デザインチーム 35

第三話 『演劇』を教える人 67

第四話 憧れの先輩 101

第五話 ステレオタイプ 133

第六話 楽観主義者 159

第七話 ゲイの定義 189

第八話 アンティゴネ 221

第九話 17歳だった僕へ 253

第十話 欲求と選択 275

エピローグ 319

カバーイラスト 柳智之

ブックデザイン 鈴木成一デザイン室

編集協力 山田真由美

## プロローグ

タケルは美しかった。誰よりも、何よりも、それまでに目にしたどんなものよりも。僕は強烈に彼に惹かれた。心の底から彼を求めた。僕たちは二人で会うようになった。会って、会って、また会った。そして気がついたときには、彼の他にはもう誰も考えられなくなっていた。

「君が今愛しているのは、男性ですか？ それとも女性？」

みやげ物屋の主人に突然呼び止められたのは、シリアというイスラム教国のスーク（商店街）を歩いていたときだった。店の主人は目配せをして、オスカー・ワイルドを知っているだろうか？ と私に訊いた。ワイルドの戯曲は1つだけ、大学の講義で読んだことがあった。1895年に上演された最高傑作『真面目が肝心』がそれである。しかしその同じ年に、ワイルドは逮捕され、ゲイであることを理由に投獄された。

「君はもともと生まれたときは100%の女性であって、ヘテロセクシュアルの人間だった。けれど君には事故が起きた。以来、君の内面は完全なヘテロではなくなり、男性的な面すら持った。現在の君は、少なくとも65%がヘテロセクシュアルを生きている。しかし、それでも残りの何パーセントかはホモセクシュアルな部分を持っている」

みやげ物屋を出ると、雑踏の中を宿に向かって歩いた。ずいぶん以前にも同じような質問を受けたことがあったな、と考えながら。

残りの35%について正直に述べるなら、私はこれまでに何度か、同性に心を惹かれたことがあった。彼女たちは、それぞれ別の時期にひょつこりと現れ、しばらくの間私の心を占領し、そしていつの間にかまた消えていった。そのときに抱いた感情が、「気心の知れた友人」に対するものとは少し違っていることに気がついたのは、もう20代も終わりに近づいた頃だった。ただ結論から先に言うと、残念ながらその想いはどれも、どこへもたどり着けないまま静かに消えゆく運命にあったわけだけれど。しかし、そんなことがあったにもかかわらず、私は自分の身に起きている現象をゲイという世界に結びつけて考えたことがなかった。それどころか、セクシュアリティというものについて、まともに考えてみたことさえなかった。

世の中には、ゲイコミュニティなるものが存在していた。もちろんゲイバーがあることも知っていた。ゲイを狙った憎悪犯罪が起きていることや、反対に人権運動が行われていることも分かっていった。「ゲイ」という世界は、いつも「そこ」にあった。いつもそこにありながら、いつまで経っても「ここ」にはなかった。新宿二丁目はそこ・にあり、女性に興味を持つ自分・はここにいた。その2つの世界は別々の次元に存在したまま、決して混ざり合うことはなかった。なぜかは分からない。

そんなふうにして過ぎていった20代の中で、最も身近に接する機会があったゲイの人物を挙

げるとしたら、それは「先生」で間違いないだろう。同時に、人生で最も影響を受けた人物を一人だけ挙げるとしても、やはり「先生」をおいて他には考えられない。彼はアメリカ留学時代の恩師で、名前をリオ・マツカーシーという。

学生だった頃、リオからは世界の演劇について学んだ。彼は学生一人一人を献身的に指導することでも知られ、その親しみやすいキャラクターによって誰からも好かれていた。教師としての人気に加え、彼には一人の人間として他に類を見ない魅力があった。彼に会うと心がスッと軽くなったし、ただ話を聞いてもらっただけで前向きな気持ちがりもり湧いてくるのだ。私は、分かりやすく先生に憧れていた。大学を卒業したあとも、その想いは変わらなかった。毎年必ず、最低2回は挨拶状を送りつけ、機を見ては先生のオフィスを訪ねた。いつだって先生に会いたかった。かまってももらいたかったし、見ていて欲しかった。彼に認められたい想いでいっぱいだった。

それにしても、である。

『一体、彼の何が、こんなにも私を惹きつけるのか』

リオが生きてきた世界に少しでも近づくことができれば、そしてセクシユアリティと真っ向

から向き合うことができれば、その答えをたぐり寄せることができるかもしれない。

リオは、自他ともに認めるゲイである。大学3回生の秋に出会ったときも、それから十数年が経った今も、彼はずっとゲイである。そうであるにもかかわらず、私は彼を『ゲイ』だと思っただけではない。そればかりか、ゲイというものについてリオと正面から話し合ったことさえ一度もなかった。

大学で教える前、リオは腕利きの舞台装置デザイナーだったと人づてに聞いたが、なぜデザインの仕事辞めてしまったのかは知らなかった。彼は10年前に亡くなった母親を大切にしていたようだったが、彼と家族の関係がどのようなものであったかを詳しく聞いたことはなかった。そして何より、30年以上もの間ずっと一緒に生きてきたリオのパートナーについて、私はほとんど何も知らなかった。

リオのパートナーは、日本人である。彼は名前をタケルといい、今から約40年前に単身アメリカへ渡りリオと出会った。タケルさんは舞台衣装のデザイナーであり、また現在は、リオと同じカリフォルニア大学アーバイン校の先生でもある。私はリオを通じてタケルさんの存在を知り、次第に同郷の先輩として彼にも興味を抱くようになった。なぜ、アメリカに行ったのか。ゲイとして、デザイナーとして、また異国に渡った日本人として、どのようにして生き延びたのか……。

まだ学生だった頃に一度だけ、タケルさんと日本語で話をしたことがあった。彼は電話の向こうから、ゆっくりとした口調でこう語りかけてきた。

「アメリカの暮らしにはもう慣れましたか？ 学校生活はいかがですか、楽しくやっていますか？ ボーイフレンドがいるのかな、それともガールフレンド？」

私は受話器を持ったまま、はにかんだ。

「何か困ったことがあったら、僕でもリオでもいい、いつでも相談してください」

あの電話から10年という節目に、私は二人に正式に取材を申し込んだ。彼らが何を考え、誰と出会い、社会の中でどう立ち回ってきたのかを一つ一つ丁寧に繙ひもといていくことにした。そうすることで、自分の中に芽生えたいくつかの問いに、あるいは振ねれたままになっていた矛盾に、それなりの決着をつけるつもりだった。

これは、私の個人的な旅の記録である。彼らが生きてきた世界の周縁を辿る、ささやかな旅だ。そして願わくは、彼らと同じ世界の中に、いやその片隅で構わない、未来の自分自身の姿を見つけ出したいと思っている。

## 第一話 ロールモデル

ロングビーチ校の修士課程入学当初に抱いた感覚は、日本で大学に入った時のものとまったく同じでした。周りにいる学生の誰もが、自分より遥かに優秀で、洗練されていて、自信に満ちていると感じました。その中には、リオもいました。とても若く、キュートな外見をした、活発で頭のキレる人です。彼は誰からも好かれていた様子でした。そんな彼が、心から僕に関心を寄せていたのです。

2011年の春、私は二人へのインタビューを開始した。彼らに会うのは3年ぶりだったが、取材という名目で会うのは初めてだった。ロサンゼルス空港に着いたあと、出迎えに来てくれた二人の車で、ロングビーチ市内にある彼らの自宅に向かった。

### ロングビーチの家（サンドウィッチ）

二人に続いて裏口から家の中へ入り、スタジオ（作業場兼、居間）の中を見渡した。傾斜のついたデザインデスクと、その上に並ぶ色鉛筆。部屋じゅうに取り付けられた本棚はよく整理整頓されていて、戯曲、シェイクスピア全集、写真集、旅行ガイドブック、ガーデニングの本、デザイン分野やビジュアルアート関連のオーバーサイズの書籍から、演劇界やファッション業界の月刊誌、それに多少エキセントリックな料理本まで、おびただしい数の書物が収められている。

部屋の真ん中に置かれた長テーブルに着くと、リオがあらかじめ用意してくれていたサンドウィッチが運ばれてきた。細かく刻んだハムとキュウリ、それにスライスされた赤いリンゴが、小さく切り分けたパンのピースを一つ一つ繊細に彩っている。別の皿に並べられたミニカツプケーキと合わせると、まるで英国紅茶サロンのケーキスタンドを前にしているようだった。私の席からは、壁一面に取り付けられた突き出し窓と、その向こうに広がる裏庭の緑が一望できる。

タケルさんは1949年に、まだ戦後の貧しさが残る東京に生まれた。大学卒業までの22年間と社会人1年目までの計23年間を日本で過ごし、24歳のときに単身アメリカへ渡った。渡米後は、ロサンゼルス周辺で職を点々とする不安定な日々が続いたが、1976年にカリフォルニア州立大学・ロングビーチ校に入学。演劇学部の修士課程で学ぶようになる。そこで先輩として実習の助手を務めていたリオと出会った。

リオは、1953年にワシントン州に暮らす一般的な白人の家庭に生まれた。10歳のときにペンシルベニア州ピッツバーグへ一家で移り住み、17歳で入学した地元の大学を3年で卒業。弱冠20歳にして、ロングビーチ校の修士課程に進学した。そして2回生の冬に、学年では1年後輩にあたり、年齢では4つ年上の留学生、タケルさんと出会い今に続いている。

二人は、修士課程にいた2年間に、舞台制作に必要なあらゆる要素について学んだ。各種デ

ザインからメイクのスキル、実用的な制作ノウハウ、それに舞台運営の全般的な流れまで総合的な経験を積み、タケルさんはその中から衣装デザインを専門分野に選んだ。

劇場におけるデザイン分野は、4つに大別することができる。大道具や小道具といった舞台美術全般を扱う『装置デザイン』、衣装やお面、メイクアップを扱う『衣装デザイン』、それから劇場内の照明システム、音響効果をそれぞれ管理する『照明デザイン』と『音響デザイン』である。

「言葉に不自由があった僕にとっては、衣装デザインの授業が一番簡単に理解できそうだったから」

とタケルさんは言った。

語学のハンデがあったタケルさんにとって、衣装デザインは比較的扱いやすいジャンルだった。大掛かりで複雑な装置の設計や、難解な照明理論に比べると、衣装制作はより実用的で身近に感じられるものだった。先生が示したものを目で見て理解し、あとは器用な手先を生かして形にしていけばよかったからだ。それに、衣装デザインを選択すれば、興味があった舞台メイクにもかかわっていける。一方のリオは、元々は装置と衣装の両方をデザインしていたが、タケルさんとの仕事の奪い合いを避けるかたちで衣装デザインからは手を引き、主に装置デザインを手がけるようになった。おかげで二人はデザインチームとして、以後20年にわたり数々のプロジェクトを共に手がけていくことになる。

タケルさんは、日本の大学でも演劇を専攻していたが、結局は舞台制作にかかわるほとんどすべてを、アメリカで一から学び直すこととなった。演劇が文学部に組み込まれている日本の大学と、演劇が芸術学群の一部として存在するアメリカの大学とでは（少なくとも当時は）カリキュラムの構造が全く異なっていたからだ。加えて、先生と学生たちとの関係もまるで違っていた。タケルさんを指導したロングビーチ校の先生たちは、日本の大学でいう『教授』のよくな近寄りがない存在ではなく、手取り足取り教えてくれるずっと身近なメンターだった。

「先生というより、彼らはロールモデル（お手本）だった。優れたデザイナー、職人、舞台作家として。それからオープンリー・ゲイ（ゲイを公表している人）としても」

1970年代に二人が通った演劇学部は、『ゲイの学部』だった。先生の何人かはゲイをオープンにしていたし、学生たちも同じだった。つまり、カリフォルニアでアートを専攻することが特別な意味を持っていた時代に、二人はデザイナーの卵として学生生活を送っていたことになる。当時からアートはゲイを容認する安全地帯であり、デザイナーという肩書は、性的指向を堂々と表明できる守られた立場を約束していた。それは70年代という時代においてはまだ、他のどの学部、どの業界にもない例外的なことだった。

「70年代に僕たちが学んでいた頃は、アーティストは今よりももっとシンボリックにゲイだった。例えば、僕らが世話になったメイク専門の先生は、筋骨隆々の肉体にピッタリと張り付くレザーのジャケットを着て、ピチピチの短パンをはいていた。身なりや振る舞い一つをとって

も、もっと特徴的だった。『デザイナーといえは、すなわちゲイ』って時代だったんだ」

もちろん、私が通った2000年代の演劇学部にも、ごく当たり前のこととしてたくさんのゲイの学生がいた。ゲイの先生もいた。彼らの何人かはセンスのいいデザイナーであり、才能溢れるシンガーであり、または美しいダンサーだった。エネルギーシユなゲイの役者や演出家たちが、私たちのキャンパスをキラキラと輝かせていたのだ。

けれど70年代とは違って、2000年代のゲイの先生たちは、これといって主張のないジーンズをはき、どこにでもありそうなシャツを着ていた。学生たちにしたところで、身なりや振る舞いを見ただけではゲイかどうか識別できないことの方が多かった。リオやタケルさんがまさにそうだ。彼らの存在は、ステレオタイプなゲイのイメージからかけ離れたところにある。彼らは女装もしないし、ピチピチのレザーパンツもはかない。

「最近のゲイは特徴が少ないから、僕のゲイダー（ゲイを察知するセンサー）も反応しなくなってきた。昔はゲイがいたら、ピピッときたものだけどね」

そう語るリオ自身がゲイであることを、私はいつ、どんなきっかけで知ったのか覚えていなかった。いつの間にか知っていた。言い換えればそれは、彼がゲイであると認識した時点において、私の中には記憶に残るような特別な感情が何も湧かなかったということ。裏付けている。驚きもしなければ、納得がいったというわけでもなかった。それは、タケルさんについても同じだ。

紅茶をすするタケルさんに、なぜ、カリフォルニアに来ることになったのか、と訊いた。タケルさんがアメリカへ渡った70年代初めとは、まだロサンゼルス行きの飛行機がハワイで給油をしていた頃のこと、海外留学が今ほど一般的でなかった時代の話である。しかも、目指した先は『70年代』の『カリフォルニア』の『演劇界』だった。なぜその道を選んだのか。日本にいた頃から自身の性的指向について思うことがあり、それ故にあえてカリフォルニアを選んだのか。あるいは、ただ純粹に演劇を勉強するために海を渡り、そこで偶然知り合ったりオガ彼の運命を変えたのか。

「うーん、……日本にいたときにも、まあ、どうなのかなというのはいったけどね。はっきりとは分からないけど、人生の中の何かは抜け落ちていっているというか……」

タケルさんは、眉間にしわを少し寄せてそう言った。答えたくないというよりは、答えようがないという感じで少しばかり考え込んだあと、彼は逆に私に訊いてきた。

「日本で、ゲイの存在を最初に知った出来事、つまり認識したのっていつだったか覚えてる？ 例えば、中学生や高校生の頃に、何かきっかけがあって知るのかな」

今度は私が眉間にしわを寄せて唸る番だった。渡米までの19年間を過ごした日本での日々を思い返してみたが、ゲイに関係する出来事は不思議なくらい何一つとして浮かんでこなかった。セクシュアリティについて考えたことがなかったばかりか、時折耳に届くホモやレズやオカマといった単語を、どのように認識していたのかさえまるで覚えていなかった。「ゲイ」と

いう確立された存在を認識したのは、渡米したあとのことだったのではないか……。タケルさんが答えに窮するのも無理はない。なぜなら当時、私たち一般的な日本人の意識の中には、『性的指向』という概念さえほとんどなかったに等しいのだから。あれこれ思考を巡らすうちに私は些細な出来事を思い出し、あえて一つ挙げるとすると、と言った。

「『ホモ』という言葉に最初に触れたのは、中学生のときだったと思います。同じ学校にとてもきれいな顔をした男の子がいて、『ホモ』だという噂を聞きました。本当かどうかは知らないし、だからといってとくに何も思いませんでした。今になって思い出すまで、すっかり忘れていたくらいですから」

その男の子は、異性にモテるタイプではなかったものの、とくに誰からも嫌われてはいなかった。ただ、彼はからかわれていた。彼のお兄さんがファッション誌のモデルをしているという話にも頷きたくなるような、透明感のある美しさが彼にはあった。白くて肌理きりの細かい肌とやわらかくて高い声、それに彼はピンクが好きだったことを思い出したところで、ふと、別の考えが頭に浮かんだ。あの当時、私たちが使っていた「ホモ」という言葉には、同性愛的な意味合いはほとんどなかったのではないかと。彼がそう呼ばれていたのは、見た目や行動に男らしさが足りなかったからであって、別にボーイフレンドがいたからではなかったはずだ。

サンドウィッチを食べ終えたところで、リオはデザートのカップケーキに手を伸ばし、ロングビーチ校在学中の二人に大きな影響を与えた、ある先生との出会いについて話し始めた。

「彼からは多くのことを学んだ。細部へのこだわりや、理想を追求し続ける姿勢、プロとしての心構えを学んだ。彼はデザイン分野の実力者であると同時に、ゲイを公言して生きている人だった。僕は彼をデザイナーとして尊敬し、ゲイコミュニティの友人として慕っていた。僕がかつて抱いていたゲイのイメージを一変させたのも彼だ」

「どんなイメージを抱いていたのですか？」

「テレビに出てくるクイーンタイプ（オネエ系）。僕が子どもだった頃は、ゲイのイメージはそれしかなかった。僕はそっちには興味がなかったから、ゲイというのは自分とは関係のない世界のものだと思っていた。だけどロングビーチ校に来てみると、まったくタイプの違うゲイの先生たちがいた。彼は僕にとって、初めて出会うごく自然な外見をしたゲイのロールモデルだった。ついでに言うと、疑いようなないワーカホリックでもあったけど」

二人は笑った。

「グラハム・フォースター。今の僕らがあるのは、彼のおかげだ」

取材を進めるにあたって、まずはロングビーチ校時代の二人をよく知る人物に会いに行くことにした。カレン・リベラは、リオと同じ年に演劇学部に入學し、卒業制作も一緒にした仲である。二人とは卒業後もずっと親交があり、タケルさんの案内で日本を旅行したこともあるということだった。

## カレン・リベラ

ユニバーサルスタジオ衣装部門・主任

ロングビーチ市内のカフェに入り、席に着いてから名刺を受け取った。ユニバーサルスタジオのマークがついた名刺で、肩書きには衣装部門の主任とあった。有名テーマパークで部下一同をまとめあげ、プロジェクトを取り仕切っている様子が、ハキハキものを言う姿から想像できる。

「あの頃のロングビーチ校は、ことアートにかけてはもの凄く評判が高くて、入ってくる学生はみな粒ぞろいでした。実を言うと私は、大学へ進学するときにもロングビーチ校を志望していたんですけれど、応募者が多すぎて入学できなかつたんです。仕方がないから他の大学に行つて、そのあと実社会で経験を積み、修士課程でようやく入ることができました。そのくらい人気がありました」

「リオを初めて見たときのことを覚えていますか？」

「最初に見たのは、そうねえ……」と呟つぶやいて、カレンは丸テーブルの真ん中のあたりを漠然と見つめた。

「いつ、っていうのははっきりとは思い出せないけれど、彼が同じクラスにいて……、とにかくとても才能のある人だということは分かりました。いつも前向きで楽しそうにしている人だったから、純粹に友達になりたくて彼に近づいたというのもあります。でも、それとは別に、やはり敵に回したくないというか、ライバルにしたくない男でしたよね。彼って、本当にデキる人だったから」

「タケルさんは？」

「タケルは最初、とっってもシャイでした」

そう言ってカレンは笑みを浮かべた。

「出会った頃のタケルは、黒くて長い髪をしていて、才能があつて。一緒にいると楽しい人でした。学生の頃は、朝から晩まで一緒に舞台制作をやっていたから、何かあるといつもアパートに集まって、みんなで楽しく騒いでいました。クリスマス、ハロウィン、ニューイヤー。タケルは最初こそ静かだったけど、言葉ができるようになったら、今度はおしゃべりが止められなくなっちゃったくらい」

カレンは笑いながらアイステイリーのストローを口にくわえた。店の奥から聞こえてくるエス

プレッソマシンのスチーム音が途切れるのを待ってから、「グラハム・フォースターという先生がいらっしゃいましたね？」と私は言った。カレンはしつかりと頷いて、ストローから唇を離した。

「聡明な先生でした。芸術や音楽の分野でいくつも学位を持っている知識の塊のような人です。先生が要求するスタンダードは並外れて高かったので、提出する課題は常にハイクオリティ、オンタイムでなければいけない、というのが私たちの共通した認識でした。それに、彼はかんしゃく癩癪持ちだったの。学生を怒鳴りつけて泣かせることもあった。あまりにも厳しすぎるので、彼のことをよく思わない人もいたはずですが、ただ、そういう学生は、なぜグラハムがそんなことをするのか、何を言わんとしているのかを理解していなかったんだと思います」

カフェの雑音を掻き分けて言葉を拾い上げるように、私は耳をそばだてた。

「グラハムは、私たちを助けようと必死でした。ひとたび学校の外へ出てしまえば、そこは容赦ないプロの世界です。グラハムは社会の現実を熟知していて、だからこそ厳しく接した。実社会で私たちが困らずに済むように、技術と哲学の両方を叩き込もうとしたのです。リオやタケルも含めて、グラハムに学んだ当時の学生たちは、今でも業界で活躍しています。劇場、テレビ、映画、テーマパーク、あちらこちらにグラハムの教え子がいます。でも今はもう、ああいう教育をする先生は少ないみたいで残念です」

「先生の期待が高い上に、周りの学生もみな才能ある人ばかりとなると、講義についていくの

は、相当のプレッシャーだったんじゃないですか？」

「もちろん。他の学生がどれほど素晴らしいプロジェクトをやったかは、見れば分かることでしたから……」

「競争や派閥争いは？」

「なかったです」と、カレンはキツパリと言った。

「それは、グラハムが学生たちを比較しなかったからでしょう。彼は学生一人一人を個別に指導する人でした。誰が優れていて誰が劣っているかではなく、クラスにいる誰もがそれぞれに努力して、学期の終わりにはみんながレベルアップしていることを一番に望む人でした。才能、才能ってよく言われますが、才能というのは実は一括りひとくくにできるようなものではないんです。その人の持ち味や、ある時点での個別のレベルというのは、みんな違って、違って当然です。だからグラハムは、一人一人の持つ強みやレベルを見極めて、その人の能力をどう生かし、どうすれば少しでも伸ばすことができるかを考えてくれたのでしよう。そして学生それぞれの進歩の度合いをこと細かくチェックして、ちよつとでも努力を怠れば叱り飛ばす。私たちは冗談で彼のことを『マザー・フォースター』って呼んでいたくらいなの。あまりに世話焼きだったから」

私が笑うと、カレンは嬉しそうに続けた。

「実際彼は、業界を生き延びていく上で役立ちそうな才能を見つけ出したら、現実的な進路の

変更を勧めることもありました。極端なケースだと、役者志望の学生を引き抜いてきて、デザイナーにしてしまおうような人だったの。その人は今、ディズニーやブロードウェイを舞台にデザイナーとして活躍していますけれど」

「リオやタケルさんにも、ブロードウェイやテレビ・映画産業に進出するチャンス、さらに活躍するポテンシャルがあつたと思いますか？」

「ええ、ありました。十分に。現実として、二人はサウスコースト（全米トップクラスの地方劇場）や他の有名な劇団で仕事をしてきて賞もたくさんとっているし、それにタケルはトニー賞にもノミネートされて」

「エミー賞ですね」と私は訂正した。

「いや、トニーですよ。エミーはテレビ業界の賞だから」

アメリカの芸術界には、権威ある賞（祭典）が5つある。映画業界のアカデミー賞、演劇業界（ブロードウェイ）のトニー賞、テレビ業界のエミー賞、音楽業界のグラミー賞、文学・報道業界のピューリッツァー賞。それらの賞が、影響し合いながら、各界の振興と芸術界全体の発展を促進してきた。例えば作曲家であればすべての賞で受賞のチャンスがあるし、脚本家であれば、グラミーを除く4賞で受賞の可能性がある。タケルさんのようなデザイナーであれば、仕事の種類によって、アカデミー、トニー、エミーを狙うことができる。

「そうなんです」と私は言った。「彼の経歴を調べていて、あれっ、と思ったんです。舞台衣

装のデザイナーだったら普通はトニーのはずなのに、どうしてエミーなんだろうって。今度、本人に直接訊いてみようと思いますが、まあその、ご存じの通り、そういうことをあまり自分から話すタイプの人ではないので……」

カレンは頬杖をついて少し考えてから、「まあ、どっちなのかは分からないけど、凄いことには違いないわ」と言った。

「それにリオもね。彼はいずれ、ブロードウェイやビッグネームの映画会社に行くだろうと思われていました。そういう未来を最も期待されていたデザイナーの一人でした」

「でも、そういう道には進まなかった」

「そうね」

「なぜでしょうか」

カレンは視線を外して少し考えてから、頭の中に浮かんだイメージを一つ一つ拾い集めるように、ゆっくりと口を開いた。

「第一に……、リオはサウスコーストでの仕事に満足していたし、それに劇場デザイナーとして高い評価も得ていたから……」

そこで、仕切り直し程度の小さな沈黙があった。

「その、私も詳しくは知らないの。ただ、あの頃同じ学部にいた仲間のなかには、テレビや映画産業に進んだ人たちも何人かいたから、業界の噂を耳にすることはありました。それでリオ

はたぶん、その手のライフスタイルからはあえて距離を置いていたのかもしれない。能力的には全然問題なくやっていたでしょうけれど、エンタテインメント業界でやっていくには、それ以外のもの、つまりその、ある種の凶太さが必要なよ。分かるでしょ？ 人脈を使って、ちよっぴり意地悪な駆け引きだつてしなくちやいけない。一種のゲームね。自分を必要以上に売り込んだり、自分ではない何者かを演じたり。……リオには、そういう資質がなかったんだと思う」

二人の恩師であるグラハム・フォースター氏に会って話を聴きたかったが、2度取材を打診したあと、正式に断られた。教え子として、また友人として、二人を大切に思う気持ちに変わりはないが、思い出話を公開するつもりはない、と。今日のソーシャルメディアによるやりた放題、ネットメディアを使った野放しの情報拡散、プライバシーの著しい侵害に対して、彼は少なからず気分を害しているようだった。

### ロングビーチの家（コックリーキッチン）

夕暮れ前、3人でおせんべいを食べているときにグラハム・フォースター氏の話が話題に上り、私は取材を受けてもらえなかったことを正直に話した。二人は顔を見合わせ、グラハムが取材を拒否した理由についてあれこれ推測していたが、おそらくは彼自身のプライバシー、つまりゲイであることをあまりオープンにできなかった世代特有のためらいがあるのではないか、という結論に行き着いた。ゲイであることによつて苦悩しなければいけない時代を生きてきた人だから、と。

「でも彼は、キャンパスではオープンにしていたんですよね？」

「確かに」と、リオは言った。「キャンパスでオープンにしていたわけだから、彼が『オープンリー・ゲイ』であることに間違いはない。ただし当時は『オープンリー・ゲイ』というもの

の定義自体が、今とは違っていた。彼は、特定のコミュニティの中ではオープンにしていたし、演劇界の外にいるときも、わざわざ隠そうとしていたわけでもないと思うけれど、では一方で、一般社会の人にもゲイであることを明快に伝えていたかという点、それはちよつと分らない。彼が育ったのは『世間の評判がすべて』という時代だったんだ。社会における一定の振る舞い方というものが存在していた時代だった。まあ僕に言わせれば、それはある意味とても日本的な気もするけれど」

リオは、ほとんど表情を変えずに続けた。

「社会にどう属し、どのように貢献するか。特定のコミュニティ内での自分の立場、世間体、家の名譽、そういったものすべてが、きつと彼の肩にもものしかかっていたんだらうね」

かつて教科書に載っていた『アメリカンライフ』を描いた一枚の挿絵が頭に浮かんだ。大きな車を運転するハンサムで知的なお父さん。美しく明るなお母さん。おめかしをした娘と息子、そして愛らしいペットの犬。それが、アメリカだった。そこには出来損ないのお父さんも、不細工なお母さんも、だらしない服を着た娘も、ゲイの息子も存在しない。存在するはずがない。それが、誰もが期待し、しなければいけなかったアメリカの姿だった。俗に『50年代フイフティーズ』と言われる、アメリカ黄金期のイメージである。タケルさんは、自身がアメリカへやって来た70年代でさえ、彼の中にはまだ、古いアメリカのイメージが一つの『典型』としてあったと言った。

「こっちに來るまでの僕の知識は、すべてテレビや映画の受け売りだったから、アメリカというものを理想化して空想していたところがあった。現実には少し違っていたわけだけど」

「それは君に限ったことじゃないよ。皮肉なことには、僕らアメリカ人自身もそうだった。何だかよく分からない『アメリカ』なるものを、テレビや映画の世界を通して空想し続けていたわけだから。多かれ少なかれ、誰もがそんなふうの世界を見ていたんだ」

「50年代的というのは要するに、見栄えの悪いもの、見たくないもの、扱い方が分からないものに全部蓋かたをして、何も問題がないように見せかけ、あたかも完璧であるかのよう装っていた時代のことだ。勝手な思い込みがあったという点では、僕も同じだった。心の底ではアーサー・ミラーやテネシー・ウィリアムズといった時代の本質に迫る書き手たちに興味を持ちながら、一方でとても単純に、ブロードウェイミュージカルに魅了されていた」

近代的な生活様式が普及し、物質的な豊かさが浸透した50年代のアメリカには、すでにもう一つの「アメリカ」が存在していた。1949年に舞台化された『セールスマンの死』の中でアーサー・ミラーは、繁栄から取り残されていく自分の現実を受け入れられない平凡なサラリーマンの混乱と、両親からの過剰な期待に押しつぶされた息子たちの挫折感を描き、理想とされるアメリカ家庭の崩壊を示した。また50年代から60年代にかけて活躍した劇作家テネシー・ウィリアムズは、代表作『ガラスの動物園』『欲望という名の電車』といった作品の中で、過去の幻想や名家のプライドに縛られるあまり、現実を直視できないまま落ちぶれていく女性たち

を描いている。タケルさんは続けた。

「そういったシリアスな書き手たちがまったく違う世界と向き合っていることを知っていたながら、僕自身もまた、ウエストサイドストーリーに出てくる理想化された男女のラブロマンスに分かりやすく憧れたりしていたわけだから。そんな華やかな世界にいられたらきつと素敵だろうな、なんて考えながら」

おせんべいを食べたあと、リオはキッチンに立ち夕飯の支度を始めた。沈みかけた太陽が、スタジオの中いっぱいに淡いイエローの光を染み込ませ、窓辺に並んだ写真立てから細長い影を引っ張りだしている。タケルさんは空になった湯のみに淹れたての緑茶を足して、ロングビーチ校を卒業した頃の話をしてくれた。

「卒業してすぐの頃は、近所の短大で教えたり、日系人のマコさんが主催するイーストウエスト・プレイヤーズ（東洋系俳優劇団）で仕事をもらったりしていた。マコさんは、僕がアメリカに残れるよう弁護士を探してくれたりして、いろいろと力になってくれた」

人種のるつぼと言われるアメリカとはいえ、演劇界は有色人種の割合が極めて低い特殊な人種構成になっている。とくに、アジア系の人口は極端に少ない。そんな業界内であって、マコ氏が1965年に立ち上げたイーストウエスト・プレイヤーズは、アジア系アーティストの駆け込み寺として機能してきた。マコ氏自身はアカデミー賞にノミネートされるなどすでにハリウッド俳優としての地位を築いていたにもかかわらず、私財をなげうって劇団を維持し、アメ

リカにおけるアジア系演劇の発展と底上げに尽力した。本来なら行き場のなかった数多くのアジア系アーティストに活動の場を提供し続けてきたのだ。駆け出しの頃のタケルさんもまた、その恩恵を受けた一人だった。

「いろいろやっているうちに、学生ビザの残り日数が少なくなった。でも、いよいよピンチというときになって、ちよつとした幸運があつてね、ロングビーチ校の衣装制作室に、たまたま空きが出た。フルタイムの主任のポジションだった。もちろん、当時の僕の実力で務まるような役職ではなかったけれど、そのフルタイムの仕事に就かない限り労働許可証を取ることはできない。労働許可証がなければ、アメリカに残ることもできない。それで困っているときに、手を貸してくれたのがグラハムだった」

グラハムの取り計らいにより、タケルさんは衣装制作室の主任として大学側から正式に雇用されることになった。そして雇用が決まるとすぐに労働許可証を取得した。いくら芸術家に厳しい労働省とはいえ、相手が大学に必要な人材となれば許可証を出さないわけにはいかなかったからだ。タケルさんとその取り巻きたちは、労働許可証に続き、ただちに永住権の申請手続きにも乗り出した。同性婚を認めていなかった当時の法律の下では、異性婚のカップルであれば配偶者として取得できる永住権が、ゲイのカップルでは取得できなかったからだ。タケルさん個人が職業人として永住権を取得しない限り、二人がアメリカで一緒に生きていくことはできない。

「マコさんやグラハムだけでなく、いろんな人が心配してくれた。リーという演出家の女性  
は、いざとなったら偽装結婚をして永住権の取得を手伝っても構わないとまで言ってくれた。  
取るだけ取ったら、あとは離婚すればいいだけの話だからって。まあ、どこまでが本気で、ど  
こからが冗談だったのかは分からないけど」

永住権の取得には長い時間がかかった。弁護士を雇い、申請中はアメリカから一步も出られ  
ない、という条件も呑んだ。そして手続きを始めてから3年が経ったある日、衣装制作室で電  
話を受けたタケルさんは、日本へすぐ帰国するよう告げられた。面接と最終審査は在日米国大  
使館が行うから、と。

「アメリカではやってくれないんですか？」

「やってくれなかった。たぶん、発行拒否になった場合に、その方が都合がいいからだろう  
ね。日本に本人を呼び戻しておけば、『米国への滞在はできません』とひと言告げた時点です  
べてがきれいに片付く。強制送還するまでもなく、本人は日本に戻っているわけだから。そう  
いうわけで電話を受けたあと、僕は久々に日本に帰国した」

さつきまで元気よく野菜を刻んでいた包丁の音が、いつの間にか消えていた。キッチンの方  
を振り返ると、お鍋の前からこちらを見ている、もの言いたげなりオと目が合った。

「不安だった」

リオはニコリともせず、そう言った。大使館のさじ加減ひとつで、二人は太平洋のあっち側

とこっち側で永遠に離ればなれになってしまうことだ。日本での前科や病歴がないことを証明し、ついにタケルさんは大使館での面接に臨んだ。

「行ってみたら、随分あっさりしたものだ。大した質問もされずに、じゃ、君、グッドラック！　なんて言われて。リオも心配していると思って、翌朝すぐに電話をかけた」

私はもう一度、キッチンを振り返った。

「あれは人生最高の電話だった！」

リオの明るい声が家じゅうに響き渡った。電話がかかってくるはずだった夜、リオはキッチンで寝た。灰色のプッシュボタン式の電話を耳元に置き、床の上で眠った。タケルさんからの電話を今か今かと待ちながら。

「いや、僕としてはリオを起こしてはまずいと思って、西海岸が朝になるのを待って電話したつもりだったんだけど……。リオは一晩中、連絡を待っていたみたいで」

電話が鳴った瞬間に飛び起き、受話器を耳に押し当ててるリオの姿が目に見えた。こうして彼らは、最初の危機を乗り越えた。

私とタケルさんは立ち上がり、夕飯の準備にとりかかった。お玉を持ったりリオからスープ皿を受け取り、ランチョンマットの上に並べた。鶏肉とポロネギを煮込んだ伝統的なスコットランド料理「コツカリキッシュ」の上に、庭のプランターから摘んできたばかりのイタリアンパセリが、清々しいグリーンを添えている。

## 第二話 最強デザインチーム

〃初めて出会った日から、彼のデザイナーとしての才能に憧れました。僕にとってリオは、常にインスピレーションの源でした。自分の仕事を彼に認めてもらう意味は大きく、彼からの承認を得ることによって少し、また少しと自信をつけ、仕事も出来るようになっていきました。リオは、キャリアを築く上での最大の支援者であり、僕の行く手に立ってたくさんの道を開いてくれた人です〃

大学院を卒業したあと、リオとタケルさんはプロのデザイナーとして仕事を始めた。リオは、全米トップクラスの地方劇場（劇団）として知られるサウスコースト・レパトリシアター（略・サウスコースト）の専属デザイナーとして雇われ、以後20年にわたって100以上の装置をデザインすることになる。タケルさんもまた、サウスコーストを中心に全米各地でデザインキャリアを積んでいった。

そこで、二人がキャリアをスタートさせたサウスコースト時代をよく知る人物に当たってみることにした。二人のデザイン歴の中で、初期の頃を中心に頻繁に名前が挙がる演出家に、リーという女性がいる。彼女と二人は、当時から公私にわたって深い親交があり、家族ぐるみの付き合いを続けているということだった。タケルさんに永住権を取らせるために、偽装結婚を提案したのも彼女だ。

リー・シヤラツト・シエメル

テレビディレクター、プロデューサー

ウエストハリウッドに近いインターチェンジでフリーウェイを降り、一般道をまっすぐ走った。彼女とやり取りをしたメールの文面からは、忙しく子育てをしつつも、こまやかな気遣いのできる女性像がイメージできた。リオやタケルさんとは35年来の親友であり、二人は、彼女の子どもたちのゴッドファーザーでもある。したがって取材にはできる限り協力したいと書かれていた。メールの返信をいつも分速でくれるだけでなく、宛名に『Nakamura-san』と、几帳面に日本語の敬称をつけてくれたのも彼女だ。

車はハリウッドの緑豊かな住宅街に入った。運転案内通りにヒルサイドの道を上っていくと、やがてすれ違う車は高級車ばかりになり、ついに私は、高台に立つ大きな一軒家の前でサイドブレーキを引いた。生け垣が広い敷地をぐるりと取り囲み、どこから中に入っていけばいいのか分からないほどだ。

リーは予想していた以上に明るく、つい甘えたくなくなるような温かみのある笑顔が印象的な人だった。数種類のチーズとクラッカーをのせた大皿に、へたを落としたイチゴを並べながら「うちもかなりユニークな家庭だから」と笑って、簡単な自己紹介をしてくれた。彼女は来年70歳になる（しかし、どう見ても50代にしか見えない）現役のテレビディレクターだった。彼

女が外で働き、夫が家のことを担当していて、18歳の二人の子どもは、男の子がプエルトリコ、女の子が中国出身の養子ということだった。

デッキに出てテーブルに着くと、ノンアルコールのシャンパンで乾杯をしてから私は取材ノートを開いた。

「リオやタケルさんに出会うまでのいきさつをひと通り話していただけますか？　あなた自身の人生も含めて」

「もちろん！」

彼女は、キラースマイルを一つ決めてから話しはじめた。コネチカット州で育ち、ウィスコンシン州の大学へ進んだこと。将来は英語の先生になるつもりだったことなどを、時間の流れに沿ってテンポよく話していく。

「演劇はもちろん好きだったけど、仕事にする気は全然なかったの。とてもじゃないけど食べていけるような分野には見えなかったから。演劇、芸術なんていうのは、真剣にやるようなものではないと思っていた。だから、大学院に入ったときも専攻は教育学だったの」

ところが、在学中に面白半分履修した演劇史のコースが意外な方向へと展開し、アジア演劇を学ぶことになった。彼女は歌舞伎や日本舞踊について学び、狂言を練習し、能の舞台を見に行った。そして、エリザベス朝の演劇と歌舞伎の比較分析をテーマに修士論文を書き、教育学とアジア演劇学の2つの分野で修士号を取得した。

「それでも当時はまだ演劇を仕事にする気はなかったから、コネチカットに戻って、数年間は高校で教えていたの。そのあと、短い結婚と離婚を機に西海岸へ移住して、今度は演技の学校に通うことになった。そんなことをしているうちに、もっと専門的に演技のトレーニングを積んでみたくなって、また大学院に入り直して……、今度は演技専攻で3つ目の修士号を取得した」

彼女は、ちよっぴり自嘲するように笑い、「そんなわけで、私は役者になりました」と、お茶目に言った。いくつかの劇団で経験を積んだあと、彼女は南カリフォルニアの有力劇場、サウスコーストに行き着いた。初めは付属の演劇学校の講師として、そのあとは役者として雇われた。そして1976年、今度は近くの大学で演出の仕事を任されることになった。演題はドラキュラ。大学側が用意した衣装デザイナーが、弱冠23歳のリオ・マツカーシーで、そのアシスタントをタケルさんが務めることになった。

「リオに出会った頃の印象は、今でもよく覚えているわよ。熟達したデザイン技術もさることながら、とくに印象的だったのが、コラボレーションを重んじる人だったってこと。彼は最初からそうだった。初めて会ったときから。ちよっと面白い話があって、そのドラキュラっていうのはブロードウェイドラマのリバイバル版だったから、私としては同じような演出でやるつもりだったの。とくに自分のオリジナルなアイデアもなく、ただ、ブロードウェイみたいな演出がしたい、ああいうゴージャスなのがやりたいって。それが当時の私が描いたビジョンだった

た。だけどリオに会ってみたら、もちろん彼のことだから、彼オリジナルのアイデアを持ってきていた。単にゴージャスなだけではなくて、時代背景を考慮した上で緻密に組み立てられたコンセプト、抜け目のないアイデアっていうのかしら。でもね、その当時の私ときたら、リオのアイデアを一瞬で退けてしまったの。『ダメ、ダメ、ダメ！ ブロードウェイ風にやるんだから』って。彼はがっかりしたはずよ。でもすぐに『じゃあ、君のアイデアでやってみよう』って、衣装制作に取りかかってくれた。彼は何というか、『仕方ねえなあ……』ってイヤイヤやるんじゃないかって、パツと気持ちを切り替えて前向きに作業に取りかかってくれたの。つまりその、私が押し付けた陳腐な衣装を作るために、より醜いデザインに描き直してくれたりして……」

彼女は前髪を掻き上げながら、大きく吸い込んだ息をあきれたように一つ吐き出した。

「彼のアイデアの方が、ずっと、ずっと良かった。あのあと数年かかって、ようやく私はそのことに気がついた。彼は言い争いをしなかった。嫌な顔一つしなかった。私のおバカな考えについて指摘することさえなかった。だから何年か経ってから、私はリオに言ったのよ、『次はもうちよっと頑張って、私を説き伏せてちょうだい』って」

彼女は笑いながら、「彼はきつと私のことを、何だ、あのハックは！ って思ったはずね」と言っただけで悔しそうな顔をした。

「ハック？」

「ハックっていうのは頭がカチカチの人のこと。同じことを何度も何度もずーっと繰り返しているうちに、機械的にしか仕事ができなくなってしまった退屈な人間のことよ」

ドラキュラのあとしばらくして、彼女はサウスコースト専属の演出家になり、リオは専属の装置デザイナーになった。タケルさんも数多くの衣装デザインを手がけるようになり、さらに、リーの現在の夫である俳優のデービッドも加わって、4人は仕事でもプライベートでもとても親しく付き合うようになった。数えきれないほどの舞台を一緒に作り上げた。

「演出家として、どのようなデザイナーを望みますか？」と訊ねると、「自分のビジョンをきちんと持っている人」と彼女は答えた。

「私が一緒に仕事をしたいと思うのは、本当の意味でのコラボレーションができる人ね。制作に取りかかる前に、話し合いの席に着いて、さあやるわよ、って一緒に腕まくりをして、どんな意見を出し合って、かき混ぜて、話し尽くした上で絶妙のアイデアが出せる人。逆に困るのは、どこかから取ってきたアイデアや自分だけの計画書を提出して『はい、これやります。終わり』ってタイプ。あるいは、『何をやってほしいですか？』って、ただ口を開けて指示を待っているような人。怠慢で融通が利かない人や、想像力に何の広がりもないようなデザイナーと組んだって、ちっとも楽しくない。そういう意味でも、あの二人が出してくるアイデア、想像力は、いつも私の予想の範疇を超えていた。彼らは台本をどこまでも熱心に掘り下げて、そこに書かれている意味をしっかりとつかんでくる。だから、相手がりオやタケルでなければ

ば、私だって自分のアイデアを持っていくけれど、二人と仕事をするときには、まず話し合うことから始めていたの。台本に描かれている世界について、価値観について、深いレベルで語り尽くした上で、全体のコンセプトと一緒に考えてアイデアをひねりだすようにしていた。そのくらい信用しているのよ、あの二人のことは」

次に、タケルさんの印象や仕事内容について訊ねると、彼の仕事ぶりを最初に目の当たりにしたのは、まだ彼女が役者をしていた頃のことだと言った。

「『人形の家』に出演したときに、タケルが衣装を作ってくれたのを覚えているわ。19世紀のビクトリア朝の衣装で、骨組みやら装飾やらが、もう信じられないくらいややこしかったんだけど、細部の細部まで入念に作り込まれていて、それは役者の目にも明らかだった。それに、彼はフィッティングを完璧にやる人ね。フィット感が抜群だから、呼吸も楽にできたし、とても動きやすかった。あんなにも複雑な衣装だったのに」

80年代に入ると、タケルさんはデザイナーとして仕事の領域を広げ始める。永住権を取得し、サウスコーストやオールドグローブなどの有名な劇団にも出入りするようになった。その起点となったのが83年だった。

「演出家として彼と最初にした仕事は、83年の『マクベス』だった。あのときは私の希望で日本的なコンセプトを用いることになって、タケルにはよろいかぶと鎧兜や歌舞伎っぽい衣装を作ってもらったの。彼の仕事の徹底ぶりといったらけた桁違いだった。鎧兜を作るために、わざわざ鉄細工の

講習に通って技術を習得しちやっただもの。そのあと、立体的な人形のモデルを制作しても  
つてきてくれたから、実際に衣装を作るまでに、あらゆる角度から徹底的に話し合っ  
て検証することできた。あそこまで極端なデザイナーは、そうそういるものではないわ。まあ結論か  
ら言うと、お芝居の全体的な評価はそれほどよくはなかったんだけど、今でも思い出すのは、  
タケルのデザインのことね。私は批評家に手紙まで書いてしまったんだから。『私の演出が気  
に入らなかったと言うのであれば、それはちつとも構いません。しかし、タケルが作った衣装  
を見過ごすことはできないはずですよ』って。そうしたら、相手から反省の手紙が送られてき  
た。タケルのデザインに対する高い評価が詳細に書かれた手紙だった。私はタケルの力をどう  
しても認めさせたかった。彼に正当な評価を与えない人に対して、猛烈に腹をたてていたの。  
確かあのマクベスで、彼は何らかの賞を取ったんじゃないか。はつきりとは覚えてな  
いけど」

実際には、マクベスでの受賞はなかった。ただし、同じ83年にデザインを担当した『ヴェロ  
ーナの二紳士』で、彼はドラマローグ賞を受賞している。また、翌84年に担当した7つの芝居  
のうち、3つでデザイン賞を獲得。その中の1つ『から騒ぎ』は、リーによる演出だった。タ  
ケルさんの快進撃は、80年代後半から2000年代にかけて続いた。ロサンゼルス演劇批評家  
協会賞の7回をはじめ、ベイエリア演劇批評家協会賞、ロビー賞、ドラマローグ賞(29回)を  
含む8つの賞で43回の受賞。ノミネーションも多数あり、なかでも97年にデザインした全米ツ

アーミュージカル『ピーターパン』によるエミー賞へのノミネートが光る。大学で教える今でもデザインの仕事は続けていて、これまでにサウスコースト、リンカーンセンター、オレゴン・シェイクスピア祭、イェールレパトリ、オールドグローブなどのメジャーな劇団を含む全米25の劇団で150を超える舞台制作にかかわってきた。さらに劇場外では、ディズニールンドやユニバーサルスタジオでもデザインを担当し、東京ディズニーシーの『ミスティックリズム』の衣装デザインから、ドリームワークスのアニメ映画『シュレック』のキャラクターに着せる衣装デザインのコンサルタントまで幅広く仕事をしてきた。

一方のリオは、今でこそ教師の仕事に専念しているが、過去のデザイン歴は、タケルさんに劣らず華々しい。デザイナーとして少なくとも37回の受賞歴があり、そのことから、当時は次から次へと受賞が続き、対象となる賞は、ほとんど総なめの状態だったことが推測できる。

タケルさんが時代もの（シェイクスピアなど）を多く手がけた一方で、リオは新しい台本、つまりワールドプレミア作品も数多く担当した。新しい劇作家を育てることでも有名なサウスコーストにいたこともあり、専属デザイナーだった20年の間に15回のワールドプレミア作品を担当している。その中にはピュリッツァー賞を受賞した戯曲もあった。彼はブロードウェイとは対岸にあたる西海岸に身を置きながら、アメリカの演劇界の第一線で仕事をしていたのだ。

そして97年、リオはロサンゼルス演劇批評家協会から「特別功労賞」を贈られることになった——その生涯において演劇界に多大なる貢献をした人物に対し、その功績を讃え、労をねぎ

らう目的で贈られる賞を、たった43歳にして……。

その97年頃を境に、リオはデザインの世界から身を引いた。以後、彼がデザインデスクに向かうことは二度となかった。きれいさっぱり、辞めてしまったのだ。

「あの当時の彼は、演劇への新しいアプローチを模索していた。別に本人から相談を受けたりしたわけではないけれど、私があげた演劇史の本を熱心に読んでいたのを覚えているわ。彼の中に、歴史的な観点で演劇を捉え直したいという強い思いや、より実験的なことをやりたいという飢えみみたいなものがあつたと思うの。例えば、コミュニティ（少数民族や性的マイノリティなどのコミュニティ）を主体にユニークな芝居を作り上げるコーナーストーンのような劇団に興味を示していた。その世界が持つ広域性や自由さに強く惹かれていたし、新しい表現方法を求めている。サウスコーストのようなメインストリートの劇団で何十年も仕事をしてきたことで、ある種の窮屈さも感じていたでしょうね。同じことを延々と繰り返すのって、結構大変なことだから」

彼女が言うと、なかなか説得力のある言葉だった。

「私もそろそろテレビ業界を離れようと思っているの。もちろん今でも大好きな仕事だけど、何か新しいことに挑戦すべきときがきているって気がするから。だって、もう30年もこの業界にいるんだもの」

「それにしても」と言って、私は嘆息した。「華麗なる転身の人生ですよ。しかも何度も」

「そう、何度も！」

私たちの笑い声が、デツキの周りに響いた。

「結果として、とてもうまくいったと思う。こんな人生になるなんて、夢にも思わなかった。学校の先生になる予定だったんだから」

「そもそも、芸術なんていう不安定な職業じゃ食べていけないという理由で教職を選んだわけですよね。でも、結局は芸術の世界に飛び込んで……、その結果が、これですから」

私は真っ青な大空に向かってのけぞり、両手を大きく広げてみせた。

「まったく予期せぬ事態だったわ」と言って、彼女は爽やかに笑った。

デツキの横のプールで、トルコブルーの水が揺れていた。その向こうにパターゴルフ用のグリーンが続き、さらにその下方の広場を取り囲む植え込みの陰で2匹の犬がじゃれまわっている。

「劇団で働きはじめた頃は、お金なんてほとんどもらえなかったけど、それでも私は幸せだった。そのあとテレビ業界に移って、最初は戸惑いもあったし、こんな続きっこないって思ったわ。ところが続いちちゃったのよ。人生なんて本当に分らないものね」

Tシャツに短パンというラフな格好で、彼女は人懐ひとなつっこく笑った。面白半分にアジア演劇を学び、修士号を3つも取ったかと思えば役者として舞台に立ち、そうこうするうちに演出家として力をつけ、最後は「こんな続きっこない」と思ったテレビ業界で30年も生き延びちゃっ

た人。

「なぜテレビ業界に移ろうと思ったのですか？」

「ただ、やってみたかったから」と、彼女はシンプルに即答した。

「そういう機会がたまたま巡ってきたっていうのもあるし。80年代は、それ以前の男性優位の社会からの変革期にあったから、女性を雇い入れることに対して積極的な時期だったの。それが追い風になったのが一つ。それと、当時のテレビ業界では、アシスタントディレクターから昇進するかたちでディレクターになるというケースが主流だったんだけど、ちょうどあの頃、演劇上がりのディレクターを使ってみようという話があったの。その頃までに私は舞台演出もたくさん経験していて、演劇界のディレクター（演出家）として認知されていたから、最高のタイミングでお鉢はちが回ってきたってわけ。だけど、轉身するのは簡単ではなかったわ。カメラのことを一から勉強し直したりして……。でも、」

そのあとに続く言葉は、聞く前から分かった。

「この世界に飛び込んでみて、よかったと思う」

リーの家を辞したあと、ノートパソコンを開いた。検索エンジンに Lee Shallat-Chemel と打ち込むと、彼女に関する記事や写真が数多くヒットした。映画・テレビディレクター、プロデューサーとして活躍し、エミー賞に4度ノミネートされた、とある。

デザインチームとして結束を強めていくうちに、人々は僕らのことをワンセットで認識するようになっていきました。まさに『デザインチーム・リオタケ』です。20年以上にわたって、50作を超える芝居と一緒にデザインしました。その多くは、サウスコーストでの仕事です。僕らは毎日24時間、37年間ずっと仕事と生活をともにしてきました。そして今なお、お互いのことに飽きていないのです。

—— タケルさんの回顧録より

## ロングビーチの家（サンタマリアBBQ）

2枚のバスタオルと2枚のバスマットが、いつもと同じ位置に折り目正しく掛けられている。相変わらず洗面台にはチリ一つなく、床には髪の毛一本落ちていない。私は、清潔な便座からソロリと尻を上げた。それから丁寧に手を洗い、ふかふかに起毛したタオルに指先をそつと押し当てて水気を取った。そして、タオルのへこみを元の形にしてからキッチンに戻った。

日が傾き始めたキッチンでは、タケルさんが夕飯の準備しているところだった。扉のあいた冷蔵庫の前で、食材をチェックしている。

「リオは料理をするときに一から材料を買いそろえる。僕は冷蔵庫にあるものを使って何かを作る。だから、コンビとしては結構うまくいっているね」

彼はそんなことを言いながら、トウモロコシを取り出した。窓の向こうには、バーベキューコンロの周りで忙しく動き回るリオの姿が見える。料理に対する二人の姿勢の違いは、衣装と装置というそれぞれが選び取ったジャンルの違いに通じるものがあるようだ。なぜならいつだったか衣装デザインと装置デザインの違いを訊ねたときに、タケルさんがこんなことを言っていたからだ。

「衣装で大切なのは実用性。人が実際に着て、心地よく動き回れなくてはいけない。あまり自由はないけれど、与えられた条件下でうまく調整していく能力が求められる。その点、装置デザインはその人の芸術性に頼る部分が多い。設計したものを、最初のビジョン通りまっすぐ作っていくという感じかな」

タケルさんが、トウモロコシに当てたナイフの刃先を滑らせると、ジュシーなライトイエローの実が、ボールの中にサラサラと落ちていった。

日が落ちた頃、庭のデッキテーブルにはキャンドルライトが灯された。テーブルの上には大小のお皿と銀のカトラリー、カクテル用のグラスが3つ並べられ、あとは焼きたての肉を皿に

のせるのみとなった。私はチェアに腰掛けて、タケルさんがシェイカーを振って作ってくれたウォッカベースの甘いカクテルを飲みながら、リオの快活な動きを目で追った。リオは、牛肉の塊に刺さった温度計をチェックし「あともう2分」と言ってから、スマートフォンのアラームをもう1回オンにして蓋をした。肉を漬け込むこと一晩。ローストしはじめてから30分。その間、数分おきにアラームを鳴らして温度を確認し、肉を裏返し、表面の乾燥度合いに応じてマリネソースを上塗りするリオの姿は、まるで実験に熱中する化学者のようだ。

「サンタマリア・バーベキュー。僕の父が住む街の名前がついた特別な料理だから、君にもぜひ、食べて欲しいと思ってね」

切り分けられた肉は、火の通りが適度に抑えられてしつとりと柔らかく、炭火でカリッと焼き上がった粒入りマスタードのソースが絶妙なアクセントになっていた。肉の感動のせいですっかり減ってしまった口数を埋め合わせるべく「あれは確か、ピーターパン特需によるものですよ」と、私は庭の奥に設置されたジャクジーに話題を振った。振っておいて、二人が話している間にせつせと肉を頬張った。

「あれは、どうやって取ってきた仕事だったんですか？　いきさつをぜひ、詳しく教えてください」

私は、2枚目の肉にフォークを突き刺した。

「あの仕事は、知り合いの装置デザイナーが持ってきたんだよ」と、タケルさんはナイフを持

つ手を止めずに言った。ピーターパンの舞台装置を担当したデザイナーが、タケルさんをプロデューサーに推薦したのがことの始まりだった。

「面接も一応はあったけど、行ったときにはもう決まっていたみたいで、その場でデザイナーを頼まれた。だから、僕のほうが逆に訊いてしまったくらいだ。『それで、僕に何を期待してるんですか?』って」

タケルさんが97年にデザインしたピーターパンは、キャシー・リグビーが長年やってきたミュージカルのリバイバル版だった。だからこそタケルさんは、プロデューサーが求めているものを正確に知っておく必要があったのだ。旧バージョンのデザインに何か問題があったのか? あるいは、まったく新しいコンセプトでの出直しを図っているのか? しかしプロデューサーからは『とくに何も問題はなく、これまで通りのコンセプトでやりたい』という答えが返ってきた。斬新なアイデアも、新しい解釈もいらぬ。ただ、ミュージカルを見にくる子どもたちが楽しめるような家族向けのデザインをやって欲しい、と。

「だから、デザイン自体はそれほど大変ではなかったけど、でも蓋を開けてみたら、ロジスティクな部分でかなり大変なことが分かった。低予算だけど全部完璧にやってくれ、って話だったから」

そこからタケルさんの奔走が始まった。ただデザインするだけでなく、制作の最初から最後までを任されることになったのだ。タケルさんは、それまでのキャリアで築き上げた人脈を駆

使して人を集め、コネのある劇団の衣装制作室や制作スタジオに協力を求めた。最低2年間は上演が続く全米ツアーである以上、レンタル衣装で間に合わせることもできず、また現代劇の衣装のようにジーンズやジャケットをどこかから買ってくるという手も使えない。ピーターパンの世界の服なんて、どこにも売っていないからだ。したがって彼は、30人を超えるキャストと、その代役全員の衣装、またアクロバットな動きに備えた替えの衣装まで、すべてを一から手作業で作らなければならなくなった。

「デザイナーの仕事というより、制作マネジメントの仕事だった。依頼を受けた直後は正直、どうなるかと思ったよ。でもなんとか、前向きな気持ちを忘れずに、と頑張ってやっていると、『手を貸すよ』と言ってくれる人が、一人、また一人と現れてきた。最終的に3つの衣装制作スタジオに協力してもらうことになって、僕らは3分割で作業を進め、無事にやり遂げるこゝとができた。だから本当に幸運だったと思うし、みんなのおかげだと思っている」

ピーターパンは全米をツアーし、ブロードウェイにも行った。ニューヨークで大々的なオーピングパーティーが開かれ、出席したタケルさん宛に、リオは西海岸からバラの花束を贈った。東海岸にいるタケルさんのデザイナー仲間たちは、子どもを連れて観劇に駆けつけた。キヤシー一座はその後、数年の休憩を挟んでツアーを再開し、近年は世界各地を回っている。そして公演が復活するたびに、タケルさんの口座にはデザイン使用料が振り込まれてくる。彼はそこまで説明すると、ニヤリと笑った。

「できるだけ長く、ツアーをやってもらいたいなあ」

97年版ピーターパンは、トニー賞のリバイバル部門にノミネートされ、その後テレビドラマ化された。それによりタケルさんは、テレビ界最大の権威であるエミー賞に衣装デザイナーとしてノミネートされた。授賞式当日、二人はタキシードを着てエミー賞の授賞会場へと向かった。エンタメ業界のセレブやスター、テレビカメラが行き交うレッドカーペットの上を、彼らは並んで歩いた。

「ほら、もっと食べて食べて」

リオが大皿にあった肉をもう一枚、私の皿にのせてくれた。肉をナイフで切りながら、私はリオに言った。

「どうしてブロードウェイに行かなかったのですか？ みんなリオの才能をもってすれば、ブロードウェイでも映画やテレビ業界でも十分に活躍できただろうって」

リオは淡々と、「その答えは簡単だな」と言った。

「まだ学生だった頃、ニューヨークに姉を訪ねて行ったことがあって、あの街には住みたくなかった。もう、かなり明快にね。大都会で緑も少ないし……」

「セントラルパークは？」

タケルさんが茶々を入れるとリオは豪快に笑い、「あの当時のセントラルパークといったら、それはそれはおっかない場所だった（ゲイを狙った襲撃事件が多発した場所）」と皮肉たっぷ

りに返した。

「ニューヨークに住みたくないというのが一つ。それに、僕が人生で最初に触れた演劇というのは、ピッツバーグの地方劇場に回ってくる地方公演だったんだ。ピッツバーグの大学で演劇を学んでいたときにも、地元のクリーヴランド・プレイハウスへ仲間とよく演劇を観に行っていた。だから僕にとっての演劇とは、地方都市の劇場（劇団）のことで、僕の夢は、そこで専属デザイナーをやることだった。それから、テレビや映画業界に行かなかったのは、早起きをするのが嫌だったから」

「ええっ、そんな理由で！」

「うん」

早起きが嫌でテレビ業界に行かなかったリオといい、ただやってみたことからテレビ業界に進出したリーといい、授業に一番ついていきやすそうだったから衣装デザインを選んだタケルさんといい、彼らの動機の単純さには呆れる。さらに緑が少ないからなどという、ヤギがこだわりの理由でブロードウェイ進出をやめるなんて……。しかし、彼らの動物的な直感と判断にはある種の爽快さがあつた。そんなふうが好き勝手に人生を選び取ることができた彼らを、心のどこかで羨ましく思う自分がある。

「テレビ・映画業界の労働シフトはめっちゃくちゃだ。日の出前から日没後まで、18時間シフトで働く。とはいっても、結局はそれと同じか、それ以上の長時間、僕らは自宅で仕事をしてい

たわけだけど」

「デザイナーって、そんなに仕事をするんですか？」

「超」がつく重労働だ」と、リオは熱っぽく断言した。

「とくに演劇のデザインは一回あたりの支払いが少ないから、いくつも掛け持ちしないと食べていけない。専属デザイナーだったときでさえギャラは歩合制だったから、量をこなさなければやっていけなかった。でも僕は満足していたけどね。大好きな仕事ができ楽しかったし、面白い人にもたくさん出会えた。ほら、まだこっちの皿に、君の肉が残ってるよ」

肉の代わりに、私は器の中のトウモロコシをスプーンですくって自分の皿に足した。クミンとチリペッパーで味を付けたトウモロコシのジューシーな食感が、肉料理の箸休めになった。私は言った。

「そんなに楽しかったデザイナーの仕事を、充実していたサウスコーストでの仕事を、どうして辞めてしまったんですか？」

「僕は、もうデザイナーとして終わっていた」

リオはそう短かく答え、膝の上のナフキンを整えながら次の言葉を探した。

「サウスコーストでの仕事は素晴らしかった。僕はデザイナーとして成長し、最高の時を過ごした。大学院を卒業するとき夢にまで見た、地方劇団の専属デザイナーになることができたんだ」

「しかも、卒業後あつという間に」と私は言った。

「そこが問題だったんだ！」

そう言つてリオは、またあの豪快な笑い声を響かせた。

「君の言う通りだよ。夢はあつという間になつてしまった。それからの20年は、次から次へと仕事が押し寄せてきた。僕はデザインの海へ漕ぎ出して、押し寄せてくる波の上で必死になつて漕いだ。来る年も来る年も、漕ぎ続けた。そして僕は、飽きた」

タケルさんが手を止めて、リオに視線を向けた。

「正直言つて僕は、君が二度とデザインの世界へ戻らなかつたことに驚いている。辞めると宣言したときには、しばらくしたらまた戻つてくると思つていたから」

リオはいつものように笑いながら、しかし迷いのない態度で首を横に振つた。そして「僕の中で起きた変化について、よくこんな説明をするんだけど」と言つて話を続けた。

「プロの世界に入った頃、僕は公演初日を一番楽しみにしていた。テクリハーサル、ドレスリハーサルを経てすべての要素がそろい、ついに初日を迎える。その瞬間の興奮が、僕はたまらなく好きだった。だけど時間とともに、興奮を感じる瞬間が変化していったんだ。リハーサルが一番の楽しみになり、しばらくすると今度は、制作が一番の楽しみになった。次はデザインモデルを作ることが一番で、というふうに楽しみがどんどん前倒しになつていった。台本を読んでアイデアを考えることが楽しみになり、ついには、次の仕事探しが一番の楽しみになつて

しまった。そのときに、いよいよ潮時だと思った。僕はデザイナーとしてやりたかったことをやり尽くした。満足感と同時に、次にどこへ向かえばいいのかという混乱があった。そんなときに、キヤム・ハーヴェイがアーバイン校で教えてみないかと誘ってくれたんだ」

「確かに、最後はアーバイン校に行き着いたけど」と、タケルさんがリオに語りかけるように口を開いた。「その前から君は進路変更を始めていたと思う。サウスコースト時代の最後の方は、ネクサスのプロジェクトもやっていたし……」

サウスコーストでまだ専属デザイナーをやっていた最後の数年間、リオと有志のアーティストたちは、ネクサスと呼ばれるプロジェクトを立ち上げた。もともと、劇作家の育成と台本重視の舞台作りで有名だったサウスコーストで、それとは別に、もっと多様性のある演劇のあり方を模索する目的で始まったのがネクサスだった。加えて、ネクサスを始めた頃に、リオはあらゆる重要な出会いをしている。コーナーストーン・シアターカンパニーの創始者の一人、ビル・ラウシと出会い、二人は意気投合したのだ。ビル・ラウシといえば、演劇への新しいアプローチを試み、それまでの演劇の概念をさまざまな面において覆した人物として知られている。アメリカの演劇が、主に白人のインテリ層に向けた芸術でしかなかった時代に、新種の演劇形態であったコミュニティーベース・シアターを立ち上げ、その世界で常にトップを走り続けてきた第一人者だ。

「僕はコーナーストーンの舞台をいくつか観に行き、圧倒された。それは、強い生命力と熱

意、エネルギーに満ち溢れていた。これまでに観たどんな舞台とも違っていて、サウスコーストの演劇とは似ても似つかぬものだった」

「サウスコーストには熱意がなかったんですか？」と、私はひねくれた質問をした。リオは、頭の中をまっすぐ整理し直すように一つ呼吸を入れてから、こう言い換えた。

「サウスコーストで僕たちが作っていたのは、きちんと組織化され、徹底的に磨き込まれた演劇。美しく洗練された芸術作品だった」

サウスコーストは、熟達した演出家、役者、デザイナーによって組織されている。プロが書いた台本があり、制作を支える潤沢な資金があり、すべては計画に沿って進行される。白人主体の典型的なメインストリームの劇団として、高い評価を得てきた。反対にコーナーストーンは、非白人コミュニティやマイノリティグループからも多種多様な人材を集め、彼らの生の声を拾い上げることで斬新な舞台を作ってきた。スタッフとして活動する何人かのプロを除けば、メンバーの大半は演劇など触れたこともないアマチュアであり、時に、英語さえまったく話せないキャストで構成されるような、常識破りの劇団である。収益がまったく見込めないばかりか、彼らは毎回の制作過程で何が起きるかも、どんなものが出来上がってくるのかも分からないなかでやっている。

「コーナーストーンの舞台は雑だ。でもキャストを見たときに僕は、彼らこそ本当の『アメリカ』を映し出していると思った。バラエティに富む人種や民族で構成された舞台には、ダイナ

ミズムがあった。ただし、コーナーストーリーが躍動感に満ちている理由は、キャストの多様性だけではない。最大の理由はおそらく、キャストたちが『芝居を通じて自分たちの声を聴いて欲しい』という心からの熱意を持っている点にある。彼らの多くは、演技のトレーニングなど受けたこともない素人だ。だから技術はまったくない。でも彼らには『演じたい』という強い想いがある。湧き上がるような情熱や煌めきがある。それを見たときに僕は『演劇が向かっていくべき方向は、本当はそっちなんじゃないか』って思った。それから、僕のコーナーストーリーに対する想いは、ビルに対する想いでもある。彼は信じられないような男だよ。今はオレゴン・シェイクスピア祭の芸術監督として500人を超えるスタッフの指揮を執り、同時に全米に築き上げたネットワークを維持しながら演劇界を引っ張っている。それに、2人の子どもの育児までやって」

ビルの超人ぶりは、その活動を知る多くの人々を魅了してきた。何もない更地を一から耕し、種をまき育てようとするビルの手法は、技術や収益や規模といった一般的な評価基準を超越した場所に存在していた。予算も認知も理解もない場所から、彼はその類い稀な人間性と執念だけで、芸術活動を前進させてきた。

「ビルは常に、『より多くの人を巻き込んでいく』というビジョンを持ってやってきた。あらゆる人を心から歓迎し、受け入れるという姿勢を貫いた。それは、とてつもなく大きな心がなければできないことだ。それともう一つ、彼が超人的なのは、一度でも会ったことがあれば、

その人の名前と顔を絶対に忘れないってことだね。コミュニティのキャストが1000人を超えても、彼は全員のことをいつまでも忘れない」

「あれは確かに、一種の才能だね」とタケルさんも同意した。「努力もあるだろうけど、特殊な記憶力でもない限り無理だ」

「僕はビルから、『方法は一つではない』ということを学んだ。コーナーストーンの理事会にいた頃、僕は自分の視野の狭さのせいで恥ずかしい思いをした。僕にとっては、サウスコーストの演劇が演劇であり、それこそが演劇の定義だった。理事会にいたときでさえ、僕の思考はまだ、そこで止まったままだったんだ」

全米トップレベルの劇団で腕を鳴らしたデザイナーが、演劇の「え」の字も知らないような素人に囲まれて思考停止してしまうのは無理もないことだ。ただし、少なくともリオは、その劇団の理事会へボランティアとして飛び込んだ。そして『己を恥じた』と言えるあたりに、リオという人間の強さの一端が窺える。

「かつての僕は演劇に対して、狭く偏った定義しか持っていなかった。でも理事会に入ったことで、違う考え方をするようになった。例えば、僕らが今、大学でやっている風変わりな楽しい演劇だって、間違いなく演劇だし、コミュニティの人たちと創る演劇だって、紛れもない演劇だ。実を言えば、コミュニティの中から湧き出してくる願いや思い、あるいは人々の情熱や楽しみの中から発生してきた芝居の方が、演劇の本来の姿には近い。演劇の核心とは、本来そ

ここにあったはずなんだ。演劇の歴史をその起源まで辿れば、そのことがよく分かるよ」

「起源」と言った途端に、リオの視線は教え子を見つめる眼差しに変化した。君なら当然分かっているとは思うけど、と言いたげな目だった。かつて学生だった頃にリオの講義で読んだ『Theatre』という本には、演劇は古代の語り部や儀式から派生したものであり、演劇の根幹は、部族の歴史や冒険談を語り継ぎ、雨乞いやヒーリングの儀式を続ける中で形成されていったと書かれていた。つまりリオがやろうとした新しいこととは、演劇の原点に戻ることだったのだ。

リオは、ネクサスのプロジェクトをやる傍ら、アーバイン校で装置デザインを教え始めた。サウスコーストに籍を置いたままの、パートタイムの講師の仕事だった。

「新しい演劇を目指すという点では、ネクサスも学校も、どちらの仕事も面白かった。でも最終的に僕は、学校を選んだ。ネクサスを通じて演劇界に起こせる変化と、アーバイン校で後進の育成を通じて実現できる変化を秤はかりに掛けたときに、僕は後者を選ぶことにした。そして、その選択は正しかったと信じている」

翌日の昼前、タケルさんは近所のプールへ泳ぎに行った。出かける前に彼がセットしておいてくれたハンモックに寝転んで本を読んでいると、リオが庭にやって来た。

「昨日のディナーで使ったキャンドルケースが一つ割れてしまっただね。まだ拾いきれていない

ガラス片があるんだ」

私は芝生の上にしやがみ、リオと一緒に破片を探しながら言った。

「リオにとつての成功って、どんなものですか？」

リオは少し考えてから、「君にとつての成功の定義は？」と逆に訊き返してきた。私は、うん、としばらく唸ってから言った。

「昔は、何かしらの名声を手に入れることだと思っていた気がします。つまりその、多くの人が抱いているような漠然とした成功のイメージとして、世間の注目を集め賞賛されることを成功と呼ぶのだろうと思っていた時期が、かつてはあったと思うんです。でもいつの頃からか、そういう感覚は不思議なくらいスッキリとなくなっていました。今は……よく分からないですね。成功ってよく聞く言葉ですけど、何なんだろうって思います」

リオは、また少し考えてから言った。

「僕も君と同じように考えていた時期があったと思う。批評家から賞賛を浴びたり、新聞に名前が載ったりすることが成功のように思っていた時期がね。でも、実際に仕事をやってみたら全然違っていた。デビューしてすぐの頃から、僕はデザイナーとして多くの賞賛を受けたし、新聞の紙面に自分の名前を見つけることも珍しくなかった。なんだ、この程度のことだったのかと思った瞬間に、かつて思っていた『成功』に対しては、まったく興味がなくなった」

リオは、チェア周りの小砂利を指先で掻き分けながら「それから、もう一つ分かったことが

ある」と言った。

「僕がデザインを辞めたとたん、過去の名声はすべて忘れ去られた。昨日の新聞は昨日の新聞。今日の新聞は今日の新聞だ。僕が去れば、すぐまた新しいデザイナーが出てきて、そのポジションを埋めるだけだ。何の問題もない。リオって誰？　ってなもんだよ。つまり、それが『名声』というものなんだと分かった」

リオにいいところを見せたくて、小砂利の中に目を凝らしたが、こういうときに限って破片は出てきてくれなかった。私は、砂利の上の手を止め、今朝タケルさんにしたのと同じ、ある質問をリオにした。

「今までに受けた賛辞のなかで、一番嬉しかったのって、どんな言葉でしたか？」  
リオは「ふむ」と言って顔を上げ、よく実った柿の木の辺りを見つめた。この質問をしたとき、タケルさんも同じように宙を見つめ、それから「とくにない」と彼は言った。批評家からも多くの賛辞を受けたはずだと食い下がる私に、タケルさんは、本当に一つも思い出せないと言ったのだ。

「批評家には、衣装デザインのことは分からないと思う。衣装を作るために、僕らデザイナーは膨大なリサーチをする。時代背景を調べたり、分析をしている。だからデザイナーどうしなら、どんな苦勞が背景にあつて、どれほど精密に作られているかがだいたい分かるけど、批評家にはそういうことが分からない。だから賢い批評家はたいい『素晴らしい！』といった抽

象的な賛辞でごまかすよね。へたに批評して自分の無知がばれないように。それと、これは僕の個人的な感覚だけど、自信作はたいてい不当な批判に合い、自分ではイマイチというものが絶賛される傾向にあった」

リオは「何を言われたのかはほとんど忘れたけど、今でも一つだけ覚えている賛辞がある」と言った。

「おっ、何ですか？」と言って、私は小砂利から視線を上げた。

「ずっと昔に、ロバート・コーエンにこう言われた。『リオ、君は不確定で曖昧なことにとってもうまく対応するね』って」

「ロバート・コーエンって、あのコーエン教授ですか？」

「そう」

コーエン教授は、65年にアーバイン校の演劇学部ができたときからの創設メンバーの一人で、学部の代名詞のような人である。

「学校以外でも、コーエン教授と一緒に仕事をしていたんですか？」

「うん。ずっと昔に彼が演出した『ヴェローナの二紳士』のデザインを担当したんだ。そのときにロバートがそう言ってくれた」

彼らに長い付き合いがあったとは知らなかった。アーティストとしてタッグを組んだことがあった事実に加え、リオが覚えている唯一の賛辞をコーエン教授が送っていたことに新鮮な驚

きを覚えた。

「曖昧さへの対応……」

私は『臨機応変』という四字熟語をイメージしながら、その賛辞の何がそんなに嬉しかったのかと訊いた。

「そうだな……」、リオの瞳がキラリと光を反射した。

「単に『素敵な装置だね』と言われるのとは違って、彼の一言は、より洗練され考え抜かれたものだった。ロバートは、僕が『演出家の曖昧さ』にうまく対応するってことで褒めてくれたんだと思うけど、それはプロセスを重視する僕にとって、最大級の賛辞だった。僕の仕事は、それがどんな方向であれ、演出家の目指そうとしているものを読み取って形にしていくことだったから。ロバートが僕の強みに気づいてくれたことが嬉しかったんだ」

「コーエン教授ですかあ……」

学生時代に教授と交わした唯一の短い会話がよみがえり、頭の芯がくらくらした。

あれは学部内のオーディションを受けに行ったときのことだった。緊張を押し殺して自分の名前を告げると、コーエン教授は書類から視線を上げ、じろりと私を見て言った。

「君は何かね、あの歌舞伎一門の Nakamura か？」

リオとタケル  
中村安希・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社  
定価 1,500 円（本体）＋税  
ISBN978-4-7976-7274-9

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)